第 59 回いそご文化資源発掘隊
磯子に花街があった

（2023 年 3 月 15 日開催）

開 催 日　２０２３年３月 15 日（水）
開催時間　１４：００～１６：３０
会　　場　杉田劇場 5 階ホール
参 加 者　240 名
第1部　　磯子にあった花街と芸者の歴史
講師：山岸丈二（花街研究家）
第2部　　横浜芸者による演奏とお座敷遊び

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
横浜の遊郭と花柳街
磯子にあった花街と芸者の歴史を追って
１．遊郭の起源
２．芸者の起源
３．娼妓と芸妓（遊郭と花柳街）
４．横浜の遊郭
５．横浜の花柳街
６．戦後の混乱と盛衰

１　遊郭の起源

日本最初の遊廓は、豊臣秀吉により、京都・二条柳町に開かれた公許の遊廓が始まりとされている。

後に六条を経て、朱雀野に移転し、島原遊廓と呼ばれた。

２　芸者の起源

江戸期の吉原遊郭では、「容姿端麗で知識や芸事」に秀でている人が太夫という最高位だったが、後に芸事のレベルが下がり太夫がいなくなった。そして、次第に遊女の芸を補助する芸者が分離していく。

芸者は一般的には宝暦５年（1755）に吉原で生まれたとされているが、最新の研究では深川発祥となっている。

吉原説から約 70 年前の元禄期に葭町（よしちょう）の遊女・菊弥が小唄三味線の師匠となり、深川八幡前に開いた茶店が繁盛し町が栄えたという伝承が有力視されている。菊弥は当時男が着ていた羽織をまとった男装であったことから羽織芸者とも呼ばれた。

３．娼妓と芸妓（遊郭と花柳街）

江戸期の芸者は遊女と明確に分離していたと必ずしも言えない。しかし、明治時代の横浜で起きたある事件が芸者の分離に関わってきた。

マリア・ルース号事件の影響

1872年（明治5年）横浜港のペルー船から
清国人苦力が逃亡
日本政府が奴隷であるとして解放し国際裁判へ

ペルー側から「日本の遊女は奴隷」との指摘
芸娼妓解放令が同年公布

実際は！？

明治 5 年（1872 年）に横浜港に停泊中のペルー船籍のマリア・ルース号から逃亡した清国人苦力（クーリー）を日本政府が奴隷であるとして解放した。これは美談として物語や映画、演劇で取上げられた。

今回重要なのは、この後の裁判でペルー側から「日本にも前借金の遊女奉公という奴隷制度がある」という指摘があり、これが「もと」で同年 10 月に「芸娼妓解放令」が公布されたという説だ。しかし実際はどうかというと…

マリア・ルース号事件の影響

明治政府はマリア・ルース号事件の前年から解放令を検討していた

明治政府は弱体化した遊郭に加え、私娼街を含めた税収の増加を目指していた

芸娼妓解放令は売春禁止令ではない
（遊郭は貸座敷として残り、解放令は事実上骨抜きとなった）

実際は、明治政府はもともと解放令をマリア・ルース号事件の前年から検討していたので、事件が解放令を生んだのではなく、解放令を後押ししたというのが正確だ。

この背景は、江戸期は遊郭から税金を徴収していたが、江戸末期には私娼街が勢力を伸ばし税収が落ち込んでいた。明治政府は江戸期の制度を壊し、野放しの私娼街も取り込んだ税収の増加を目指していたのである。

従って、解放令は売春禁止令ではないということが重要なポイントだ。

芸娼妓解放令の公布（1873年）

・芸妓・娼妓の人身売買の禁止
・前借金の無効

貸座敷渡世規則の公布（1874年）

遊郭は貸座敷営業指定地として指定

娼妓規則・芸妓規則の公布（1874年）

娼妓、芸妓は鑑札許可
娼妓と芸妓が公的に分離

さて、この「芸娼妓解放令」を受け、翌年、「貸座敷渡世規則、娼妓規則、芸妓規則」の 3 規則が公布される。上はそれぞれの規則の概要である。

とくに３つ目の娼妓・芸妓規則により遊女と芸者が法的に区別されたが、娼妓と芸妓が変わらず貸座敷営業指定地に共存していた。

その後、新たに芸者町の花柳街である貸座敷が誕生するので、旧遊郭と区別が付きにくい理由の一つになる。

三業地と二業地

三業地 ： 料理屋・芸者置屋・待合
二業地 ： 料理屋＋芸者置屋か待合

待合は料理屋と違い料理を提供しない（仕出し）

見番（検番）：三業・二業組合の事務所
→芸娼妓の取り次ぎ、玉代の計算などの事務

東京では新興花街が増加し、花柳街＝芸者町へ

料理旅館は遠方から芸者が派遣される二業地に多い

さて貸座敷営業指定地だが、三業地・二業地などとも呼ばれていた。

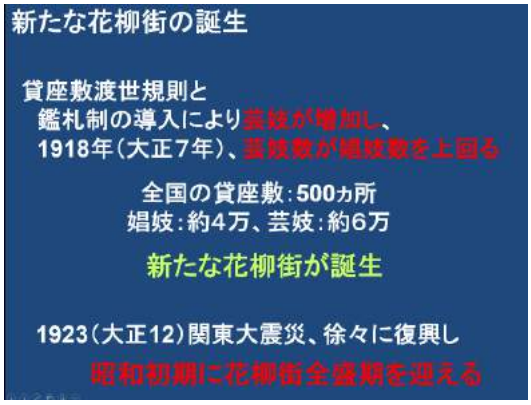
三業地とは、公安委員会から「料理屋・芸者置屋・待合」の３種の営業が許可された指定地、二業地とは「料理屋に芸者置屋か待合のいずれか」が許可された指定地である。

待合は遊興と飲食の場だが、料理を直接提供せず仕出しだった。これが料理屋との大きな違いである。

見番とは、三業や二業組合の事務所の俗称で、芸者を登録させ、客席に出る芸者の取り次ぎや玉代(ぎょくだい)の計算などの事務を扱った所になる。

また、東京においては大正期以降の新興花街が「三業地」という名称を使い始めて、花柳街＝芸者町の意味合いが強くなってきた。

なお、芸者置屋が無い二業地には、他の場所から芸者を呼ぶため泊まりがけとなるため、料理屋と待合を兼ねた「料理旅館」があり、神奈川は料理旅館が多い傾向だった。



貸座敷渡世規則と鑑札制度により芸妓が増加し、大正７年には初めて全国統計で芸妓が娼妓の数を上回り各地に新たな花柳街が誕生した。

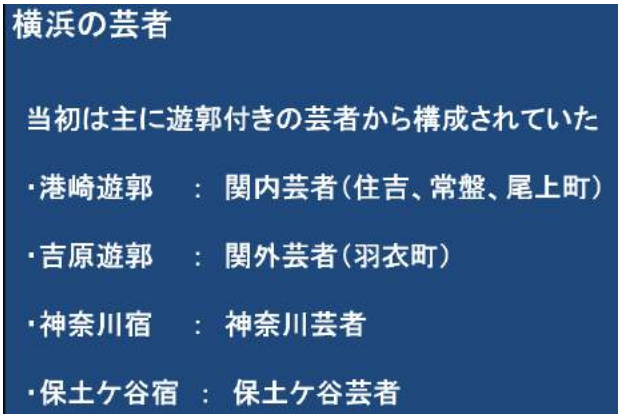
大正 12 年に関東大震災が起きて一時不況を迎えるが、徐々に復興し昭和初期には花柳街が全盛期を迎える。以上が昭和戦前までの話である。

４．横浜の遊郭

続いて、横浜の遊郭の流れについてお話しする。

横浜開港に伴い、外国奉行は開港場に近い関内の太田屋新田に港崎遊郭を作った。港崎遊郭以降、火災等で、吉原、高島町、真金町と３回移転し、昭和 33 年の赤線廃止まで存在した。

５．横浜の花柳街



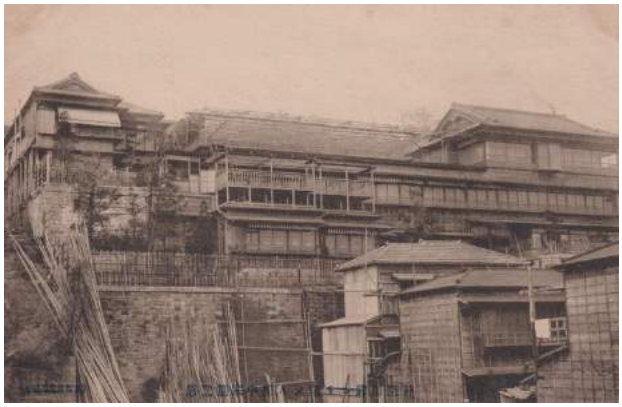
一方で、横浜の花柳街はどのように変化したのか。横浜は、港崎遊郭横の関内、吉原遊郭横の羽衣町、宿場女郎がいた神奈川、保土ケ谷宿など、遊郭地に近接して芸者置屋が多

くあった。

中でも関内は横浜随一の高級花柳街で、関内芸者は一流芸者の代名詞だった。

大正 11 年には、あの阿部定も関内にいた。

これは戦前の関内の割烹料理店・八百政。今は同じ場所にヤオマサビルが残っている。



これは、戦前の神奈川宿の田中家。

各地に新たな花柳街が誕生

大正期の見番所在地

関内、関外、本牧、日本橋、蒔田、
井土ヶ谷、御所山、掃部山、藤棚、磯子、神奈川、
東神奈川、子安、鶴見、潮田、保土ケ谷

震災後設立

大久保、森（磯子区）　　網島温泉

廃止

寿（関外へ合併）、弘明寺（蒔田へ合併）、
平沼（戸部へ合併）、戸部（御所山へ合併）、
最戸（大久保へ合併）、元町、北方

出典：横浜市史稿　風俗編

「貸座敷渡世規則」の公布後、横浜にも多くの花柳街が大正期を中心に誕生した。

大正時代には磯子に見番ができている。

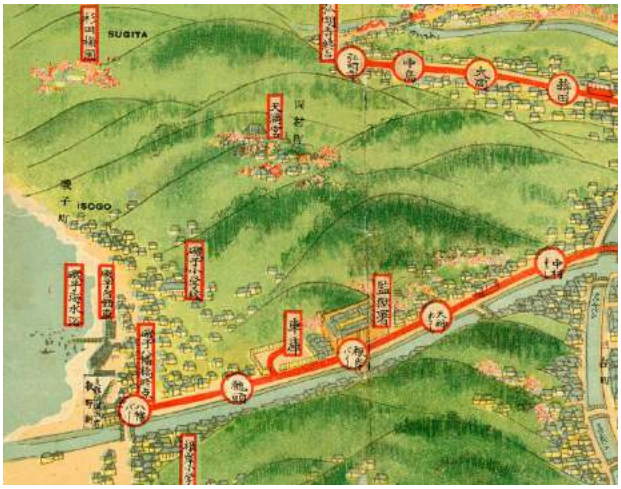
更に関東大震災後、磯子の森町（屏風ヶ浦）にも花街ができた。

磯子花街のあった場所は堀割川南西の崖下の海岸線で、ここは明治中期から大正初期にかけて、埋め立てられた。

磯子は南が海に面し、北に山を背負う地形であり，風光明媚であったことや海水浴場に適していたことから、当初は避暑地として開発された。

花柳街の中心地は赤枠で囲った場所。

現在はその場所に、「埋地」という NTT ケーブルの支線名が残っている。



これは埋め立てが終わったあとの絵図。横浜名所案内図絵（1921＝大正 10 年）

新大横浜市全図（Ｓ９）。数カ所の海水浴場が整備されている。さらに温泉旅館ができて、徐々に横浜の財界人や外国人たちの別荘や保養所ができた。

それが、大正時代に花街へと発展した。写真は花柳街の祭りの風景。上の写真は老舗の料理旅館・梅乃園の前で撮影されている。

これは磯子見番だが、磯子は「料理屋と待合のある二業地」だった。後に芸者置屋もできた。実質的には三業地だったのだが、なぜそのまま二業地だったのかは研究の余地があるかと。

海岸線の料亭・雨月荘。山の上にプリンスホテルの日本庭園の鐘楼が見える。

また、大正７年創業の待合・たづなの主人・金川利三郎（かなかわ　りさぶろう）は伊勢佐木町の寄席「新富亭」に出演するほどの芸達者だった。その後、古今亭志ん生の門下となり真打ちに昇進し「二代目・古今亭志ん馬（しんば）」となり、俗称で「横浜の志ん馬」と呼ばれた。

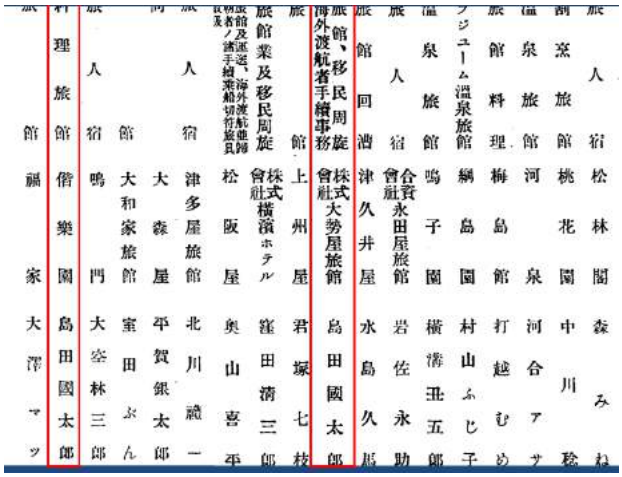
新大横浜市全図（Ｓ９）。地図の左下に「偕楽園海水浴場」の名前が見える。この場所に磯子花街随一の巨大料亭の偕楽園があった。

これは昭和 22 年（1947）の観光案内。磯子海岸と偕楽園と雨月荘の紹介がある。

偕楽園の全景《出典：『浜海道』》

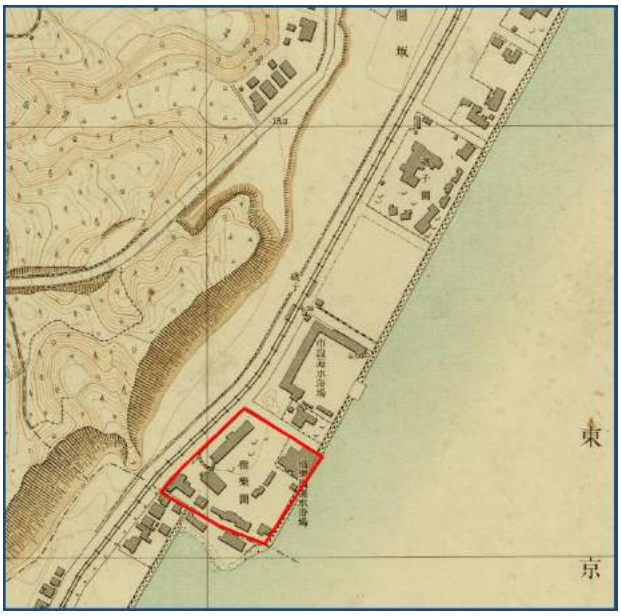
偕楽園は、明治 43 年創業、明治 40 年の梅乃園や大正 11 年の磯子園と並ぶ老舗料亭で、海軍の利用も多く、横須賀にあった料亭「小松」と同様、海軍料亭と呼ばれていた。

さて、この偕楽園の経営者は何者なのかという謎がある。



昭和 9 年の『横浜市商工案内』。右側の赤枠は、関内にあった海外移民の人々が多く宿泊した移民宿「大勢屋旅館」、左枠は「偕楽園」。経営者は同じ「島田国太郎」となっている。

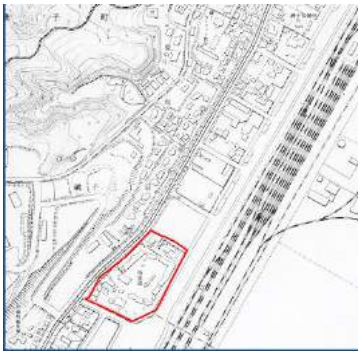
偕楽園は、移民宿の組合である「横浜外航旅館組合」が経営していた。他の資料では「株式会社偕楽園」の表記もある。



これは昭和 8 年の地図。偕楽園は左下の海に面した場所にあるが、戦後、根岸湾の開発により海の埋め立てが進んでいく。

これは昭和 30 年代の埋め立て後の写真。《出典：『浜海道』》

偕楽園海水浴場は無くなり、海岸線は遠くなっている。



昭和 38 年の地図。偕楽園の目の前に根岸線と貨物線ができている。この頃になると、遊興地も関内などの中心に移り、偕楽園は昭和 43 年に閉館した。

磯子花街の痕跡。偕楽園のあった場所は、駅前の磯子アイランドと３丁目住宅になっている。

磯子区役所の隣にあった温泉割烹「江戸徳」は江戸徳ビルに名前が残り、裏手には創業 100 年の碑がある。

磯子二業組合の組合長で、地元の実力者の葦名金之助は、葦名橋や日枝神社に名前が残っている。

また、葦名橋交差点近くの山の上にある海向山金蔵院（かいこうざん　こんぞういん）には、関東大震災で崖崩れに巻き込まれて亡くなった偕楽園の女中の方々の慰霊碑がある。

裏面には亡くなった方々の氏名が刻まれている。

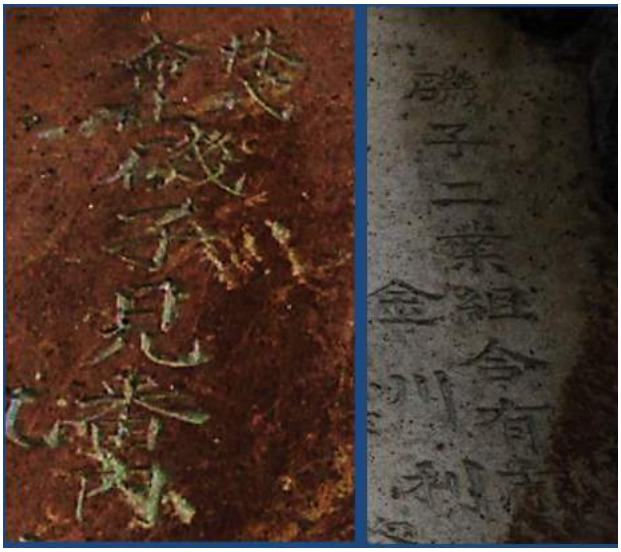
また、磯子旧道入口交差点手前のあたりに

古い電柱が残っている。地元の方のお話によると、この電柱は花街時代から残っているものだそうだ。

丁度この道の先に見番があったので、この通りが花街のメイン通りだったのだと思う。

八幡橋（やはたばし）の八幡神社（はちまんじんじゃ）にも痕跡がある。

八幡（はちまん）神社の球体が乗る石碑には、「磯子二業組合・芸妓組合」の名が刻まれている。



磯子見番や、二業組合有志として金川利三郎の名前。

料理店・深川などの名前もある。

６．戦後の混乱と盛衰

昭和初期に全盛期を迎えた花柳街も、戦争により大きな変化を余儀なくされる。

敗戦を迎えると、進駐軍専用の特殊慰安施

設・通称ＲＡＡが設立されて、旧遊郭を中心に多くの女性が集められた。

敗戦と進駐軍

戦後の横浜の進駐軍慰安所

当初バンドホテルを検討したが互楽荘となる。
その後、各所において営業開始に再変更

昭和20年9月3日開始
大丸谷、曙町、新天地、楽天地、入船私娼街、蒔田二業地

同9月5日開始
真金町遊郭、大久保二業地、磯子二業地

その後
磯子・森、綱島

出典：神奈川県警察史（下巻）

横浜にも互楽荘に慰安所が設置されることになるが、利用者が多くなり、市内の旧遊郭、私娼街、花街に分散さていく。

磯子二業地や森町もその一つだった。

敗戦と進駐軍

1946（昭和21）GHQ指導でRAA解散、娼妓取締規則を廃止（街娼、私娼が増加）

「特殊飲食店（カフェー）」の風俗営業許可地が赤線、非許可地が青線

花柳街は進駐軍の利用が多くなり、「フジヤマ、ゲイシャ」が世界に広がる

亀有の赤線（個人蔵）

昭和 21 年には人権問題からＧＨＱの指導でＲＡＡが解散、娼妓取締規則が撤廃された。これにより長年日本で行われてきた「公娼制度」が一応、無くなった。

しかし、行先のない女性が街娼・私娼となり問題化したため再び、貸座敷に変わり「特殊飲食店」と呼ばれる風俗営業許可地ができた。許可地が赤線、非許可地が青線と呼ばれ、特飲街またはカフェー街と名称を変えた。

一方、花柳街は、そのまま芸者街として存続し利用者は進駐軍が多くなった。

戦後の引揚者や軍需産業から転業者が急増

1946（昭和21）の横浜市の花柳街

	待合	料理屋	芸妓屋	従業婦
磯子二業組合	13	3	21	80
掃部山二業組合	11	32		49
井土ヶ谷二業組合	13	2	19	74
蒔田保険組合	3	1	1	25
日本橋保険組合	4			22
鶴見二業組合	3		3	23
戸塚二業組合			5	17

出典：神奈川県警察史（下巻）

昭和 21 年の横浜市の花柳街。規模として最大なのは磯子二業地になる。空襲からの復興が早かった地域で差が出ていると思われる。

1957年（昭和32）売春防止法施行、公認遊郭が消滅

1956（昭和31）の横浜市の対象地

	業者	娼婦
本牧ホテル街	42	288
楽天地	8	23
曙町	107	311
大丸谷	13	79
新天地	26	102
入船カフェー街	52	180
真金町	214	715

出典：神奈川県警察史（下巻）

昭和 32 年に、売春防止法が施行され、翌 33 年に江戸期から続いていた「公認遊郭」がついに完全消滅した。

労働基準法施行（昭和22年）
→満17歳にならなければ芸者デビュー出来ない

児童福祉法施行（昭和22年）
→幼少期からの仕込みが出来ない

サラリーマンの増加
→旦那、お大尽の減少

キャバレー、ナイトクラブの台頭
→安価で手軽な遊興場が席巻

周辺環境の都市化
→東京オリンピックで都市化が進み風情が退化

戦後の花柳街にも変化が訪れる。とくに、労働基準法や児童福祉法により、幼少期からの芸者の仕込みができなくなり、芸者が減少していく。

さらに、サラリーマンの増加で、花柳街で遊ぶ旦那衆や大口の遊興費を落とすお大尽が減少する。

サラリーマンの遊びは安くて手軽なキャバレーやナイトクラブへと変わる。

また、花柳街は多くが風光明媚な場所に存在していたが、周辺が都市化されて風情が無くなりつつあった。

この頃、吉野町の日本橋や磯子花柳街に芸者学校ができたが、時代の流れには勝てず、花柳街は徐々に縮小・閉鎖されていった。

横　浜	平成29年、横浜芸妓組合発足 横浜のイベントなど多数出演
八王子	見番建替、石畳舗装など町の協力で復興 置屋ふみ乃家などメディア多数出演
大森海岸	大森茶屋を中心に4つの置屋あり 置屋まつ乃家などメディア多数出演
円山町	見番は無いが、喜利家鈴子を中心に徐々に芸妓を増やしている

しかし、近年、各地でその歴史と文化を守りたいと望む人々が出てきている。

ぜひ、横浜でも徐々に花柳街が復興すると面白いかと思う。

地図上の料亭や割烹旅館等は、ある一時期の状況をプロットしているのではなく、昭和初期から 34 年にかけての情報を載せている。出典は「火災保険図」「磯子区明細地図」「横浜商工名鑑」など。

原本の文字がかすれていて判読しづらいため、漢字の間違いがあるかもしれません。

第２部　横浜芸者による演奏とお座敷遊び

磯子小唄

磯子花街で親しまれた唄だったが、磯子芸妓組合が無くなってしまうと共に、この唄も唄われることはなくなった。
2021 年、胡弓奏者　木場大輔が三味線を作調（※）し、復活した名曲。

※作調…邦楽で、三味線の曲に合わせる囃子（笛・小鼓・大鼓・太鼓など）の奏法を定めること。
また、和太鼓の曲を作ることをもいう。

踊り：横浜かでん・横浜富久丸・横浜楓

横浜楓

横浜かでん

野毛山節（ノーエ節）

この曲は開港直後の文久年間に野毛山から見た居留地の兵隊をモデルにして作られた。オッピキヒャラリコなど日本らしい擬音でラッパなどを表現している歌詞が面白い。
大変人気があったメロディーで、静岡では「富士の麓でノーエ」という替え歌も残っている。

濱自慢（復興小唄）

今年は関東大震災からちょうど 100 年。
濱自慢は震災後、私財を投げ打って横浜復興のために尽くした原三溪が作詞している。この杉田からも当時、三溪園に杉田梅を船で運んだ記録が残っている。
春夏秋冬の四番形式で、「横浜良いところじゃえ」と横浜の情緒を感じさせるこの曲は、震災、戦争、そしてコロナと、その時代の芸者を救った名曲である。

横浜かでん・横浜香太郎・横浜楓

柳の雨

唐人お吉は実在した女性。
開港後の日本はすぐに外国人を受け入れたわけではなく、とても警戒していた。
国のために、見張り役として外国人の妾にさせられる女性もいた。
一見華やかで給料も良かったことや、様々な事情から同じ日本人から「ラシャメン」と差別を受け、自ら命を落とした女性がいた。

開港した横浜は、いいことづくしだけではなく、こういった女性達にも守られたのだということを伝えるのも、横浜芸者の使命だと思っている。

美空ひばりメドレー

この杉田で初舞台を踏んだ歌姫の人気のナンバーをお楽しみいただいた。

お祭りマンボ～真っ赤な太陽～東京ブギウギ～愛燦燦～川の流れのように～お祭りマンボ

篠笛：横浜わ加

踊り：横浜楓

お座敷遊び

「とらとら」

「金毘羅船船」と並んで、芸者とのお座敷遊びの定番として長年親しまれてきた日本の伝統芸能。ジェスチャーを使ったジャンケンである。

近松門左衛門の浄瑠璃「国性爺合戦（こくせんやかっせん）」の主人公である「和藤内（わとうない）の虎退治」をモチーフにしている。

遊び方

１．芸者とお客の間に屏風などを立てて、お互いの姿が見えないようにする。

２．ジェスチャーの決まりは、「和藤内」は槍で突くポーズ、「虎」は四つん這いのポーズ、「老母」は杖をつくポーズ。

３．和藤内は虎に勝ち、虎は老母に勝ち、老母は和藤内に勝つというルールである。

４．唄に合わせて、ポーズを決めた二人が屏風から同時に身を乗り出す。屏風で見えなくても、他のお客さんの表情から芸舞妓さんのポーズを予測して駆け引きをするのも楽しみの一つと言える。

三崎遊魚～やっこ凧～

漁師町ではもっとも親しまれている神様が恵比寿様。伊弉諾伊弉冉（イザナギイザナミ）の第一子として生まれたが、足が立たず、海に流されてしまった。だが、釣りを覚え生き抜く強さを知っていることを評価され、七福神に唯一日本の神様として入っている。

縄文時代から続く仮面劇の傑作「神楽」と、弥生時代から続く化粧の美学「芸者」とのコラボが最近横浜で話題を呼んでいる。

また凧は「上がる」ことから縁起物とされ、昔から親しまれている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊